

▶ 第10回目となる今回は、山梨学院大学 法学部法学科 1年 名取沙莉那さんが、株式会社かいや 代表取締役社長 田中俊男氏を取材しました。



学生

山梨学院大学
法学部 法学科

1年 名取 沙莉那 さん

不断に 自分を見直そう

経営者

株式会社 かいや
代表取締役社長

田中 俊男 氏



▶ 学生

はじめに、御社の概要と特色を教えてください。

▶ 経営者

昭和52年に創業し、主にあわびの煮貝を取り扱っています。戦国時代、駿河の清水港は武田の領地で、そこから甲府へ海産物を送っていました。当時あわびは騎馬軍団の戦場食として塩漬けにされていましたが、戦が減り、山賊が最も恐れられるようになるなど、塩漬けから醤油漬けに変化していったのです。清水から馬の背に揺られる間に生醤油の酵素が働いて、甲府に着くころちょうどあわびが美味しくなる。これが煮貝の始まりといわれており、現在ではあわび以外にも多くの貝を煮貝にして販売しています。

歴史は浅いけれど36年間この狭い世界でやってこられたのは、やはり社訓にもあるように、謙虚な気持ちと不屈の精神で美味しいものを作ってきたからでしょうか。わが社の特色は、狭い世界の中で商売をしているということです。特殊なものを販売する。だからこそ楽しいですね。

▶ 学生

経営者として喜びを感じる瞬間はありますか。

▶ 経営者

社員からどれくらい尊敬されているのかっていうのはよく考えています。ですから私生活のことで相談されるととても嬉しいですね。一番喜びを感じるのは、感謝されていると実感したときでしょうか。「無財の七施」という、笑うだけでいいよ、席を譲るだけでいいよ、といった教えがあります。気持ちだけで相手を施すことは出来るんですね。よくみんなに言うのですが、「残心」、心を残さない、というのが私の座右の銘です。これは、立ったときに椅子をもとに戻したり、トイ

レを出たときにスリッパを揃えておいたりするなどという些細なことなんです。簡単なことですが、これをしておかないと次に使用する人は不愉快な気持ちになりますよね。ですから、わが社の商品すべてにも、心を残さないよと言っていきます。

▶ 学生

現代の若者の仕事に対する意識を見ていて感じることはありますか。

▶ 経営者

ゆとり教育の中で育ってきた今の若者たちには、積極的な子が少ないと感じます。仕事が出来ないわけではなく、言わなければしない。そういう子は、商品を作っていて次のステップで付加価値を作ろうとしても出来ないんですね、絶対。出る杭は打たれると言うけれど、出て行かないと抑えられる苦しみはわからない。ですから、自分の意見は言うこと。そのためには、自分の持っている基礎知識や、礼儀・態度を見直す必要があると思います。

あとは、自分に敵しい人になってほしいですね。そうすれば、規律が守られた職場で食品が造れるようになるでしょう。私はよく、身だしなみについて言いますが、それも同じで

す。最近は服装が乱れている子が多いですが、センスが悪ければ良い製品は造れない。自分を格好良く見せることが一番だと思います。

▶ 学生

就職活動を行う学生に向けてアドバイスをお願いします。

▶ 経営者

しっかりと相手の目を見て話をしたり、聞いたりすることが出来る子であれば、私は即決しますね。自分の意思を伝えられるような目線があれば十分です。昨年のインターンシップのとき、私を真っ直ぐに見て挨拶をした学生がいました。その学生は今年の春からわが社で働いています。

とある企業では、この企業で働きたい、という強い意志を持った就職希望者が、その企業の製品について詳しく研究してくるらしく、また、採用者の意識もとても高いそうです。ですから、真面目にやってくれば会社のほうから引っ張ってくれるんですね。「不易流行」といった考え方や、先程言った「無財の七施」や「残心」を実践することで、高い意識が作られていくのではないのでしょうか。

取材を終えて…

経営者の方に直接お話を伺う機会はあまりないので緊張しましたが、とても良い勉強になりました。取材当日は、従業員の方が立った状態で迎えてくださり、また、取材を終えたあとも同じようにお見送りいただきました。ご丁寧にご対応くださり、ありがとうございました。私が就職活動をするのはまだ先のことですが、田中社長にいただいたお話は、自分の将来を考えていく上でとても貴重なご意見となりました。お忙しい中この企業レポートにご協力くださった皆さま、誠にありがとうございました。

